

50 周年特別寄稿

長野県におけるヒュウガセンキュウの分布とシナノノダケについて

鈴木 浩司*

日本国内におけるヒュウガセンキュウ（図 1）の分類学的歴史は浅く、南谷忠志氏が宮崎県内で発見したことから始まる。南谷氏は小葉や果実などの形態を精査し、形態的に中部地方以北に分布するオオバセンキュウ *Angelica genuflexa* に似ているが、草丈が高く、小葉は卵形で、鋸歯が大きく、網目が大きい（粗い）などの違いから別分類群と考え、ヒュウガオオバセンキュウと仮称した（南谷 1997）。その後、山崎敬氏により、セリ科シシウド属の独立種 *A. minamitanii* として記載され、和名をヒュウガセンキュウとした（Yamazaki 2001）。

筆者はそもそも花の匂いの多様性に興味があり、香辛野菜として知られ、またポリネーションに関してはジェネラリストとして知られるセリ科植物の花がどのような花の匂い特性を持つのか興味があり、セリ科の花生態について研究を始めた。当初は花の匂いや訪花昆虫の調査を行っていたが、次第に種の同定が自分自身で納得出来ないものが出てくるようになり、分類学的に整理しなければならないと考えられるようになった。そんな折、京都大学総合博物館の永益先生より、宮崎県のヒュウガセンキュウについて、またヒュウガセンキュウとされる植物が広島県でも見つかった（窪田ほか 2003）との話を聞き、研究の取っ掛かりとしてヒュウガセンキュウの分類学的研究を始めた。

南谷氏がすでに指摘したように、宮崎産や広島産のヒュウガセンキュウは確かに形態的には小葉が中部地方のオオバセンキュウに似ているが、鋸歯が大きく、やや厚ぼったい感じがオオバセンキュウとは異なり、二つを並べると区別できるが、どちらか一つだけを見ているときは混乱してしまうぐらいよく似ている。さらに形態観察と同時に DNA 情報を用いた分子系統学的解析を行ったところ、DNA 情報からは両者はまったく異なっており、容易に区別できることが明らかになった。DNA 情報からも広島県産のものがヒュウガセンキュウであることが確認できた。



図 1. ヒュウガセンキュウ（宮崎県小林市）

オオバセンキュウとヒュウガセンキュウの形態について目が肥えてきた頃に再度標本庫のオオバセンキュウの標本を観察してみると、近畿や中部地方にヒュウガセンキュウではないかと思われる標本が見いだされるようになった。つまり、特にオオバセンキュウの生育が知られている地域では、ヒュウガセンキュウをオオバセンキュウと同定してしまっている場合があるのではないかと考えられた。そこで、オオバセンキュウが分布している岐阜県および長野県において、ヒュウガセンキュウが分布していないかどうかを調べることにした。なお、2012 年には高知県牧野植物園の藤川氏から高知県の山中にヒュウガセンキュウのようなものが見つかったと知らせを受け、DNA を調べたところ、確かにヒュウガセンキュウであった。

岐阜県および長野県で採集された材料の DNA 解析の結果を図 2 に示した。その結果、岐阜県においてはヒュウガセンキュウは見つからず、すべてオオバセンキュウであった。一方、長野県においては

* 富山県立大学工学部

〒 939-0398 富山県射水市黒河 5180

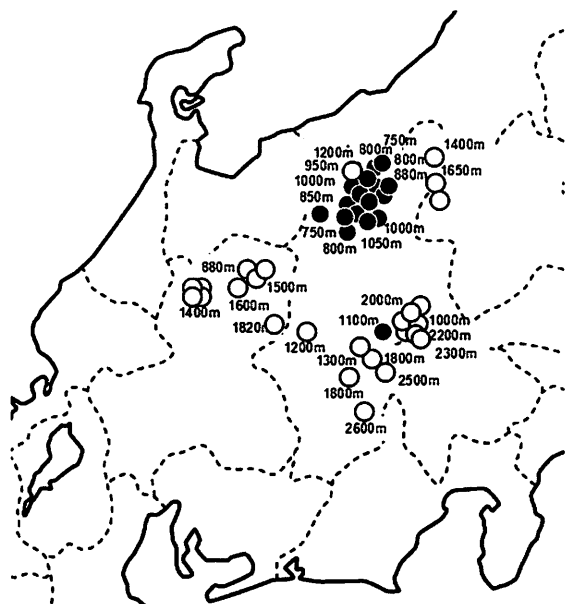


図2. 岐阜県、長野県におけるヒュウガセンキュウおよびオオバセンキュウの分布。黒丸はヒュウガセンキュウ、白丸はオオバセンキュウ。

南信ではオオバセンキュウが多く見られたが、北信ではヒュウガセンキュウが広く分布していることが示された。標高を踏まえて見てみると、ヒュウガセンキュウの生育地はすべて標高 1100m 以下であり、北信地域の人里付近で見られるものはほとんどヒュウガセンキュウであった。一方、オオバセンキュウはすべて 1200m 以上に生育していることがわかった（岐阜県の 1 ケ所を除く）。これまで同所的に生育している場所は見つかっておらず、両者はうまく住み分けを行っているようである。ヒュウガセンキュウは宮崎や広島の自生地も同様だが、比較的湿った環境に出現する。オオバセンキュウも湿地に見られ、両者の生育場所の違いを決定している要因が何なのか興味深い。岐阜県では標高の低いところで採集された材料が少ないため一見するとヒュ

ウガセンキュウが生育していないように見えるが、標高の低い場所（～ 1100m）でのさらなる調査が必要であろう。

図2のなかで、南信地域に 1 ケ所だけヒュウガセンキュウが見つかった場所がある、この場所は山崎敬氏が「シナノノダケの再発見」（山崎 1990）をした場所で、山崎氏がシナノノダケとしたものは DNA 的にも形態的にもヒュウガセンキュウであり、シナノノダケはいまだ再発見されていないことになる。シナノノダケの自生地に関しては八ヶ岳山麓としか分かっておらず、さらなる探索が必要である。ヒュウガセンキュウやシナノノダケタイプ標本の写真は長野県植物研究会誌第 48 号（東 2015）に載っている所以適宜ご参照いただきたい。

本研究を行うにあたり、特に長野県植物研究会の会員の皆様および長野県環境保全研究所に便宜を図っていただいた。ここに記して感謝します。

東浩司. 2015. 長野県産セリ科シシウド属植物の分類学的問題点について. 長野県植物研究会誌 48: 115-116.

藤川和美. 2012. ヒュウガセンキュウ. FLORA of KOCHI, No.28.

窪田雄一・窪田正彦. 2003. 広島県植物誌資料(4). 比婆科学 210: 21-27.

南谷忠志. 1997. 宮崎県産植物ノート(3), シシウド属の新植物～ヒュウガオオバセンキュウ. 宮崎県総合博物館研究紀要, 第 20 輯: 69-76.

Yamazaki, T. Umbelliferae in Japan III. J. Jpn. Bot. 76: 307-320.

山崎敬. 1990. シナノノダケの再発見. 植物研究雑誌 65: 153-154.